

幼兒の手仕事に就いて

東京高等師範學校教授 柳橋源太郎

幼稚園時代から小學校初年級程度に於ける兒童發達の生理的・心理的方面の事に就ては、これ迄兒童學・心理學の研究で相當に明になつて居るに拘らず、今日の教育の實際では理論を無視して居ると思はれる點が案外少くないのである。就中、此程度に於ける兒童課業の大部分を占むべき手の仕事に關しては種々遺憾と思はれる事が多い様である。

私は、幼稚園の實際に就いては知る所極めて少く、全くの門外漢ではあるが、此程度の兒童が幼稚園や小學校から時々家庭へ持つて歸る手藝圖畫杯の成績物に就いて見ると、概して指先や眼の細筋を使用させる課業の多い事が想像出来る。學校ばかりでなく、家庭に於ても、此程度の女兒が南京玉繫ぎの様な細い細工をして居るのを往々見受ける

のである。細い手仕事が此程度の幼少な兒童の眼を損し、上體の姿勢を悪くし、一般に生活機能を妨げる事は言ふ迄もないが、神經生理の上から見ても、細筋と細筋を支配する神經及び中樞の未だ十分發達して居らぬ、即ち眞の陶冶期に達して居らぬ此程度の兒童に對して細い仕事を強ひる事は不合理的である、夫よりも比較的粗大な易い仕事の方が適當して居る。手先を大きく使うか、臂全體を使用する様な大きい仕事に適當して居るのである。

それで、英國の小學校の規則などでも、其幼稚科には五才から手藝を課する事になつては居るけれども、細い仕事や眼に害のある様な細工は嚴禁して、可成粗らい仕事を課する事に規定されて居る。

米國ニューヨーク市のエシカルカルヂュエスタ

トルの如きも、幼稚園の四才の組から手細工を課して居るが、其の手細工たるや頗る粗大なものばかりで、玩具の家具や其の他種々の玩具の製作と言つた様な事柄である。そして之れを特別な細工場で簡易な工具を使つて木材から造らせる事にして居る。勿論木材と言つても自然の丸い儘の細い枝幹や或度まで加工して直に細工に使用出来る様になつて居るものである。そして、臂や手全體の比較的大きい筋肉を使つて可成大きい粗らい細工をさせる事にして居るのである。

同校では、小學校の第一學年は七才からであるが、此程度になると手藝科の工具としては男女を通じて小形の槌鋸鉋錐の類を使はせる、又細工としては出來合の古箱から、それに屋根を附けたり窓を穿つたり、飾を施したり、家の内部の設備をしたりして、玩具の茶杯を造らせて居る。第二三學年程度の縫編の細工扱にしても男女の區別なく太い纖維や絲それに特に大きい針を使つて粗い物

を編ませたり縫はしたりして居るのである。

幼稚の兒童に畫させる繪畫にしても亦同様である。これは英米獨の幼稚園小學校皆同様であるが、何れも臂や手を大きく使つて一二尺大時には其れ以上の大きい繪を畫かせて居る。此種類の歐米兒童の作品は、御茶水の東京教育博物館に數多陳列され居る。勿論、此程度では全然記憶想像から描かせた自在畫ばかりで、臨本や實物から描かせる事は、不適當とせられて居る。そして其の材料としては、白墨色聖筆木炭軟い色鉛筆杯を用い、小包郵便の包紙に使う面の粗糙な褐色の大きい紙や羅紗紙の様な面の滑でない色のある畫用紙や、壁面の塗板や、各生徒の机上に裝置してある生徒用の小塗板に畫させるのである。我が邦で見える様な硬い一錢鉛筆で小さい白紙上へ小さい繪と臨本を見て畫せて居るのとは大に其趣を異にして居る。元來石筆や硬い鉛筆は幼兒の手先きで自在に之を使ひこなし、制御する事は頗る困難とする所であ

るのみならず、之が爲に姿勢の上や視力の上へも悪影響を與へて面白くないのである。幼稚園や小

学校の初年級では、使い易い即ち制御し易い軟い殊に色のある材料が最も適當して居るのである。

「幼児の今昔」に就ての所感

東京女子高等師範學校
附屬幼稚園主事

安井哲

私は、現行法令の尋常小學第三學年からの針仕事でさへ尙ほ聊か早きに失するといふ感を常に有つて居るものである。故に幼稚園程度や小學の初年級に對しては細筋の使用は一層考へ物である。

殊に、長い時間に涉つての過用と來ては、益警戒を要するのである。其の結果必ずや兒童を神經質にしたり、早熟に傾かせたり、順當な發達を妨げたりせずには措かないのである。兒童從來の發達に對して、少からぬ妨害を與へ、回復し難い損害を被らしめる事になるのである。

これまで幼稚園から小學校へ入つて來た兒童の成績に就いては、種々な實驗の結果や統計上の結

論があり、中には、幼稚園教育の効果を疑う者さへあつた様である。私が以上述べ來つた問題は此點からも亦大に考慮を要する事柄ではあるまいか。

幼稚園で先生々と慕つて居る愛らしい幼兒を見る毎に、此温たかな美しくしい生活を何時まで記憶するであらうかとは、密かに起る疑問でありました。固より幼稚園の先生自身は、將來に於て幼兒から假令精神上でも、何等かの報酬を得たいと期待して居られはしますまいけれども、幼稚園關係者としての自分は、保姆の方々が如何なる面倒な事でも、如何なる汚ない事でも何とも思はず、眞に母親が吾子に對するやうな心情で親切に世話を